

# 民主的教授会を批判する「 なしに斗争の眞的強化はなし」

六、七日卯月の中ですぐに学生のストライキに対し、「学生の本分」「異常事態」という名でもつてさまさまな圧力を加えてきた文学部教授会は、六・一〇「未定」以来、調査費計上、マスター・プラン審議会と/or、移転更築化の中で苦境に立ちながらも、学生の「ハネリ」を押さるために我々の斗争への干渉を加えてくるだろう。本日十八日の説明会も用意はその一環として位置付けられる。現在、執行部が主張している「民主的教授会との連結」という論理は、ヨイを「民主的」教授会とのアーマイな共通に流しながらなり、結果的には、文学部の大塚殘留という文教授会のセクタ的な論理にまたがることになる。従つて我々は、「民主的教授会」たる文教授会を批判することなしには、那波斗争の眞的強化をはかりえないと考える。八日十七日発行された「将来計画に対する文学部教授会の審議」では、沖縄報「を中心」に文教授会を批判してみたり。もちろん、このことは他学部教授会の共通性を減するものではなく、また、教授会を我々の立場にとって和解できない象力等のみ有すことを断つておく。

この「報告」は、主要に教授の移転審議における「形式」、「手続」における民主化が破壊についての文学部教授会の他学部への批判であり、その限りでは我々の認めうるものが多い。従つて、教授会の見解を検討する我々の視点を審議における「形式」、「手続」にれば、推進派、他学部の「民主主義破壊」に対し、文教授会の「民主主義」のみが見え、これから「民主的教授会」とのアイマイな共通と/o「統一戦線」にはなりにむことになる。だから我々の批判は何よりも審議の「内密」でなければならない。

だが「報告」の通り、そしてまた他学部もとの見地に立つて、この「学問研究の水準」と教育の効果と向上させるという見地」は一体何であり何をもたらしてきたのか?、それは教授の考へている学問研究と教育が社会との関連をぬきにしたものであり、それがもたらしたもののが、正にシーキャンパス論なのである。「学問研究の水準と教育の効果とを向上させる」ということを教授がなぜ必要と考えるのか?、ということがまったく明らかでなく、又現在の教育大のかゝえる問題が何であるかさえも明らかでない。その見地は「市場競争における国際競争力の強化」ための基盤となるべき学問研究水準の向上と、座席で対話の効力を生産するための教育の効果の向上」という資本の論理に組み込まれていくものである。事実、大島前学部長の「琉球研究園都市計画」と自体を開拓するのではなく、文学部にとつて(?)どうではなく教授の研究にとつてと言うべきだ。教授がどうなのか?、ということを考えている。「どうではなく教授の研究にとつて」という資本の論理に組み込まれていくものである。事実、といふことを無視している。そしてまた「資本主義社会にある現在は、学生は労働者になつていく」という同教授の発言は、現在の資本主義社会の中での労働者になるならざる見えない学生ヒーラー講義から、無批判的に、資本が労働で良質の労働力を生産するためにかけてくる大学教育への攻撃をやむをえないものとして認めてしまうものである。口先で「受験勉強の弊害」などと言ふ教授がそれに対する解決しようとしたことの表われである。つまり教授の研究が趣味的なもの以外ではないことを示している。従つて、教授にとつて、那波計画を保障するものであるということ、東京から余りに遠い「広大な土地」は研究の障壁になることが移転費の分り目となる。文学部教授会の言う「那波では研究に不便である」という主張と、移転案成学部の言う「こゝにこゝは研究の発展はありえない」という主張と、同じ立場に立ちながら、「広大な土地」というものではかないことになる。そしてその「広大な土地」が研究のための施設を保障するものであるということ、東京から余りに遠い「広大な土地」は研究の障壁になることがあることが移転費の分り目となる。文学部教授会の言う「那波では研究に不便である」とあわせて、それが自己の趣味的興味をもつてスケルム的研究の死滅とあわせて現れる現状をうかがはれることは、間違いない。